

平成 26 年度「支援機器等教材を活用した指導方法充実事業」成果報告書

団体名	香川県
研究開始年度	平成26年度

I 概要

1 指定校の一覧

設置者	学校名	障害種
香川県	高松養護学校 ^{たかまつようごがっこう}	肢体不自由
香川県	香川西部養護学校 ^{かがわせいぶようごがっこう}	知的障害

2 研究テーマ

研究指定校、実践先進校の研究交流や「ICT教材等データベース」の構築・公開による支援機器等教材を活用した指導の充実および指導技術の普及啓発

3 研究の概要

(1) 肢体不自由のある児童生徒の生活の幅を広げ、豊かにするための指導の充実

① 外出時の支援機器の活用について

目標：外出活動など実際の社会の中での支援機器等教材の活用により、狭くなりがちな行動範囲や活動経験を広げ、生活を豊かにする。

内容：外出時に安心・安全を補うツールとして支援機器を活用できるようにするための指導方法の研究を行う。

② 重度重複障害児童生徒への指導における支援機器の活用について

目標：重度重複障害児童生徒のコミュニケーション手段を増やし、生活を豊かにする。

内容：重度重複障害児童生徒の理解や表現について実態把握や観察方法について検討し、普段のコミュニケーションや活動のなかで支援機器を有効に活用していくための研究を行う。

(2) 知的障害のある児童生徒の「わかってできる」状況をつくるための指導技術の充実

目標：既存の教材のなかでICTを活用する方がより効果的であるものについて切り替えを図り、「わかってできる」授業の充実を図る。

内容：「既存の教材に変えてICT教材を活用するねらい」ごとに実践事例を整理し支援機器を効果的に活用できる条件についての研究を行う。

(3) 「ICT教材等データベース」等による指導技術の普及啓発

目標：支援機器等を活用した教材やそれを用いた指導技術を県下の特別支援学校や地域の幼・小・中・高等学校等に普及させる。

内容：県下の特別支援学校で活用されている支援機器等教材の情報をデータベースに集約し、Web公開することで地域の幼・小・中・高等学校等に指導技術の普及啓発を図る。また、研究指定校で公開授業や公開講演会を行う。

4 研究の成果及び課題

(1) 肢体不自由のある児童生徒の生活の幅を広げ、豊かにするための指導の充実

① 外出時の支援機器の活用について

校外学習の際に児童生徒一人が1台『スマートフォン』や『タブレット端末』を携行して状況に応じて地図やナビゲーション機能、インターネット機能を使って行動を組み立てたり、メールやメッセージ機能を使って支援者等に連絡をとったりする学習を行った。

外部専門家の指導のもと、導入する場面や活用するアプリケーションの種類や機能などについて検討を行い、「外出活動スキルチェックリスト」の中にICT機器の活用スキルについての項目を設け、アセスメントや評価、指導目標の設定を繰り返すことで習熟度を向上することができた。また、事後の児童生徒へのアンケート（福祉用具心理評価スケール：PIADS）から、支援機器の活用は、肢体不自由児の外出活動に「安心感」を与え「ストレス」を軽減し「コミュニケーションの機会」を増やす顕著な心理的効果があることがわかった。また自己評価を高め、人とのつながりを促す可能性も示された。

チェックリストや評価指標の見直しを行い、より有効なツールとするとともに、機器を使いこなせるようになるための指導のポイントも明らかにしていくことが今後の課題である。

② 重度重複障害児童生徒への指導における支援機器の活用について

これまでの実践で、重度重複障害のある児童生徒自身が支援機器を使って活動に参加してはいるものの、その先の変化や活動の内容自体に気づいていないと思われる場面がよく見られた。上記の課題を踏まえ、本研究では、外部専門家の指導のもと、複数の事例について指導者とのやりとり場面での児童生徒の発信行動を分析し、意図的発信行動を支援するための支援機器のフィッティング方法について検討を行った。

事例研究を通して、支援機器をフィッティングするにあたり、身体の動きの観察だけではなく、言語理解や興味関心についても、身体の動きの変化から読み取ろうとすることが重要であることが分かった。また、児童生徒が主体的に選択や意思表示をするためには、単に支援機器の形態や設置場所の検討を行うだけではなく、十分な実態把握を基にして、児童生徒自身の動きを増やすような人や物のレイアウトややりとりの流れの工夫が大切であることが分かった。

支援機器のフィッティングのために、指導目標と観察の視点のマッチングがスムーズにできるような資料を作成することが今後の課題である。

(2) 知的障害児のある児童生徒の「わかってできる」状況をつくるための指導技術の充実外部専門家の指導のもと、教科指導や日常生活の指導など様々な学習場面で支援機器等教材を活用した結果、支援機器等教材は、言葉の概念や抽象的な事柄を視覚化、イメージ化することができ、視認性に優れているため、児童生徒の学習に気付きを与える有効な支援ツールになることや、支援機器等教材の活用については、利用するねらいを明確にし、ねらいに応じた工夫や配慮を行うことで、児童生徒の学習の理解を深めたり、学習意欲を喚起したりすることができることが確認できた。

さらに、支援機器の活用事例を「既存の教材に変えてICT教材を活用するねらい」ごとに

整理したところ、「学習の理解」「課題の提示」「見本・モデルの提示」「手順の提示」「時間の提示」「繰り返しによる定着」「活動の振り返り」「集団活動のなかでの個に応じた配慮」に分類され、それぞれのねらいにおいて、ICTを活用した教材が、学習や活動への理解を促す上で有用であることが分かった。

児童生徒の発達段階等と効果的に活用できるICT教材との関連性を分析し、どの児童生徒にどのような教材が適しているのかといったフィッティングに関する資料を作成することが今後の課題である。

(3) 「ICT教材等データベース」等による指導技術の普及啓発

外部機関の協力のもと「ICT教材等データベース」を作成、管理し、研究指定校を中心に特別支援学校の授業のなかで成果のあったICTを活用した教材をデータベースに集約している。平成26年度は、各特別支援学校に公開し、指導技術の共有を図った。平成27年3月末～4月にWeb公開（約150教材登録予定）し、広く支援機器等教材の普及啓発を図る予定である。

研究指定校の研究実践を県内の特別支援学校で共有するために、各校の研究や情報教育の責任者等で構成される、支援機器等活用に係る特別支援学校連絡協議会を2回開催し、情報交換を行った。

2校の研究指定校において支援機器等教材を活用した公開授業を開催し、県内の特別支援学校より約30名の参加があった。また、両校において外部専門家を招き、支援機器等教材活用についての公開講演会を開催し、県内外より約200名が受講した。

支援機器等教材や指導技術の一層の普及のために、「ICT教材等データベース」の登録教材の内容と量の充実や公開授業の拡充が今後の課題である。